

# いま地域医療は

自治医科大学卒業生  
からの現地レポート  
NO. 317

## 大島診療所

宗像市国民健康保険大島診療所  
園田 知文（福岡県）

平成十五年に自治医科大学を卒業後、平成二十一年四月に宗像市国民健康保険大島診療所に赴任し、早くも一年が過ぎております。平成元年に現在の診療所が新築・移転され、以後は自治医科大学卒業医師の福岡県からの派遣が続いており、私で十四代目になります。

当診療所の診療圏としては、本土よりフェリーで二十五分の大島地域の、人口七百人強の住民を対象としています。ほかの離島山間部へき地と同様に高齢化も進行しています。が、八十・九十を過ぎても元気に歩いてこられる方も多くいらつしやうて、こちらが元気をいただいたり、いろいろ教えていただいたりするこ

とも多々あります。

普段の診療としては、内科慢性疾患の管理を中心とした外来診療が中心となりますが、島唯一の医療機関ということ、〇歳児から百歳の方まで診察することになります。そのため、診療範囲も内科にとどまらず、外傷・熱傷などの外科疾患や、電気治療などの需要の多い整形外科疾患、乳幼児健診・予防接種・小中学校の校医を含めた小児科診療に従事しています。また、観光シーズンには、観光客の突然の急病やケガへの対応も求められることがあります。島内での救急要請時は、診療所と交代制で一人常駐している消防職員とが協力して、患者へのファースト

トコンタクトを行います。島内では狭い路地も多く、一般の救急車は入れないところもあるため、現在では救急車を廃止し、島内の患者さんの搬送には寝台を取り付けた軽ワゴン車が活躍しています。高次救急の適応となる場合は、基本的には船で本土の港まで搬送し、本土の救急隊へリレーします。この場合、診療所としては、救急救命士としての役割も強くなると思います。

介護・福祉面では、地域に密着した介護福祉施設と診療所の連携もでき、認知症患者などへのデイケアやヘルパー事業、ケアプランの作成などに尽力いただいています。入所施設こそありませんが、家族の協力が得られれば、寝たきり患者の在宅療養も何とか可能になってきており、住み慣れた地域での生活を望む声に応えることができつつあります。

離島医療を経験させていただく中で、自分の力不足も感じる一方、課題も多く感じており、いくつか所感を述べたいと思います。

高齢化が進む中で、外来診療におけるニーズとして、内科慢性疾患・

整形外科疾患・眼科疾患などが需要の高いものとして挙げられるかと思えます。しかしながら、へき地診療所に派遣される医師にとっても、専門外の疾患を診ることは不安があります。そのため、患者さんが時間をかけて、ほかの医療機関を受診することになります。代診医の派遣などを通して、一人の医師では対応が不十分になる分野を補完できる形を構築することで、患者さんの利便性の向上や健康の向上に寄与できると思います。

ほとんどのへき地診療所では公立の運営であり、地域での保健医療の施策を実施していくためにも、行政との連携は必須となります。ときにへき地診療所での勤務では、精神的に孤独感を感じることもあり、情報交換や精神的サポートのためにも顔の見える関係を望みたいと思います。

まだまだ道半ばではありますが、地域医療・離島医療の発展向上のために微力を尽くしていきたいと思えます。